



卒業研究のテーマや研究方法を具体化する試み： 「人間科学演習Ⅰ・Ⅱ」授業から

人間科学部 秋山 美栄子



香川県出身。2001年に文教大学人間科学部に着任し、社会福祉関連科目を担当している。専門は看護・福祉学、高齢者心理学で、高齢者領域の学際的なアプローチや人材育成、介護保険サービスと総合的ケアなどを研究している。
(あきやま みえこ)

人間科学部では、「人間を科学的・総合的に理解できること」、「課題発見や問題解決のための方法論を修得し、幅広い教養と人間社会への深い洞察力をもつことができること」、「自ら選択した研究テーマに基づいて、文献研究・実験研究・調査研究・実践研究等に従事し、論理的かつ客観的にその研究結果を記述することができること」を卒業研究の到達目標に掲げている。卒業研究を遂行するためには、どのような取り組みが必要であるかについて、「卒業研究」の下位延長線上にある「人間科学演習Ⅰ・Ⅱ」で実施しているゼミ活動（コミュニティ・カフェ）を紹介する。

1. 「人間科学演習Ⅰ・Ⅱ」について

人間科学部には人間科学科、臨床心理学科、心理学科の3学科があり、それぞれ学科ごとのカリキュラムが設定されている。ここで紹介する「人間科学演習Ⅰ・Ⅱ」は3年次における春・秋学期のセメスター科目であり、通年において同一ゼミを履修する学部共通ゼミナール科目である。原則として、学生は所属する学科の枠を越えてゼミを選択することができる。また、4年次の卒業研究を目指して、学生の研究テーマによる指導教員の専門領域を考慮してゼミを決定することが前提となる。とは言え、2年次秋学期後半でのゼミ選択時期において、卒業研究のテーマや研究領域を検討できる学生はどの程度いるであろうか。ぼんやりと興味関心のある領域や仲の良い友人と一緒にゼミ選択程度の意図でゼミを希望するという声も聞く。

本科目は、教員と所属の学生によって特色豊かに運営されているが、卒業研究への完成度の高さはもとより、研究活動において学生の主体性をどのように発揮させるかという課題も大きいと考える。

2. 研究テーマ・課題を整理し検討する目的でのゼミ活動

「人間科学演習Ⅰ・Ⅱ」で筆者のゼミを選択する学生は、高齢者領域に興味関心があり卒業研究のテーマを検討している学生が多い。昨今の超高齢化社会で、最も関心度が低いと批判されがちな若い世代にあって、高齢者に着目する学生の存在は大いに頼もしく好感が持てる。しかしながら、これらの学生が高齢者の実態をどの程度理解しているかについては、関連科目で学習した知識レベルでありリアティーのなさが懸念される。一般的にも

核家族化の進展に伴い、3世代同居家庭の割合が減少する一方であり、自身の祖父母に会う機会は年に1-2回という学生も少なくない。それゆえ学生の高齢者イメージは、報道によるニュースや記事で扱われる特殊なイメージおよび近所のコンビニやアルバイト先でよく見かける高齢者イメージが中心であり、偏ったステレオタイプの傾向が見られる。

そこで、まずは研究対象である高齢者をより現実的に理解するために、実際に交流を持つことが必要であるとの考えから本ゼミはスタートする。各学期に1回程度ゼミの時間帯に地域の高齢者を招いて、介護予防目的の体操やストレッチ、認知症予防の脳トレや趣味活動等を中心とした「コミュニティ・カフェ」を開催している。以下、その取り組みについて紹介する。

導入として、まず身近な高齢者の観察や声掛け、そして目的ごとの訪問（高齢者サロン、認知症カフェ、介護予防教室等）、さらにボランティア活動等を通じて交流参加体験を課す。それらの学びを整理して、学生主体の高齢者との交流企画（コミュニティ・カフェ）へと発展させていく。この企画に関しては、3・4年生合同ゼミ活動として取り組んでいる。

春学期は情報過多の中、4年生からの指示で右往左往しながら部分的に企画に参加する現状があり、企画したプログラムの進行状況の把握も覚束ない3年生が少なくない。本企画の対象は、大学近隣に居住されている60歳以上のシニアとしているが、募集方法も含めて学生が考える。企画のチラシを作成して直接ポスティング、自治会回覧板、公民館や老人福祉センター、自治会館、社会福祉協議会等に掲示させてもらう交渉や広報活動にも工夫が必要である。いわゆるアウトリーチのトレーニングである。

秋学期になると春学期の経験を活かして3年生が主体的に企画を立案し、補助的なポジションとして4年生の役割分担を決め配置することができるようになる。企画のチラシや看板の手配、会場およびアクセスの準備とそのため必要な各部署との連絡調整や手続等の学びも貴重である。何より参加者である

高齢者への気遣いができるようになることには感動する。試行錯誤の賜物であるが、自転車での来校者には自転車置き場の案内や声掛け、30分以上も前に来校する高齢者も多いと知ると雑談しながら居場所を提供できるように「おもてなし」精神が成長していく。つまり、自然にコミュニケーション能力が身についていくプロセスともいえる。

研究への準備段階として、様々な手順等の手続きを先輩から後輩へと引き継ぎつつディスカッションを深め、追体験していくことは効果的であろう。そして、これらの経験が高齢者との距離感を縮め、現実的な理解へと発展していくのではないかと考えられる。学生のもつ高齢者に対するイメージが変わり、学生個々の研究テーマが現実的で具体的なものへと変化する。先行研究のレビューで得た分析結果の解釈が深まり、自身の研究目的が設定できる段階的な学習機会となっている。



3. まとめと今後の課題

毎年度の学生メンバーにより、取り組む内容や課題は異なるもののグループワークの威力を発揮して展開される企画運営は、様々な学びや示唆に富む成果であると評価できる。この企画の様子は、話題提供として人間科学部（心理学科）HPにアップされている。

「人間科学演習Ⅰ・Ⅱ」は、卒業研究の準備として基礎的な科目であり、各自が関心を持つテーマの設定と研究方法の選択の関係を学び、自主的な研究テーマの設定能力を習得できることを到達目標としている。

残念なことに本年度はCOVID-19の影響により、大学への立ち入り禁止とオンライン授業の実施でこのような企画はできなくなった。今後は新しい工夫で高齢者領域の研究を深められるように指導方法を模索したい。